

彼同分について

福田 琢

【一】説一切有部は、経験世界におけるあらゆる事象を、それら諸事象の原因となる諸々の基本的な存在単位、すなわちダルマ (dharma 法) のレヴェルにおいて考察する。たとえばわたしたちがものを「見る」という事象は、有部にあつては、眼 (眼根) と、対象である色形 (色) と、視覚機能 (眼識) という三つのダルマが共同 (接触) して視覚を構成することを意味する。ダルマとは、一種の範疇論的概念であり、「固有相 (自相) を保持するが故にダルマである」(svakṣana-dharanād dharmā) と定義されている。固有相とはあるダルマの概念の内包を意味する。たとえば眼の固有相とは「見る」と、色の固有相とは、なんらかのいろ・かたちとして「見られること」、眼識の固有相とは、なんらかのいろ・かたちを「識別すること」であり、そしてそのような固有相をもつが故に、任意の眼、色、眼識はそれぞれ〈眼〉〈色〉〈眼識〉という概念 (範疇) にくくられるのである。

【二】ところで、有部によるダルマの考察は時間的にもきわめて厳格なものであり、先の規定はどの一瞬の眼についても適用されるものでなければならぬ。したがってこれだけでは、たとえばわたしたちが眠っている間の眼のように、対象を「見ない」ときの眼は、「見る」という固有相を欠いているから、〈眼〉というカテゴリーに属さないということになってしまう。そこでかれらは、このような、実際に「見る」はたらしに關与しない眼を、

「それ (色形を見る眼) と同類の眼」(rat-sabhaga-cakṣus 彼同分眼) と名づけた。つまり彼同分の眼とは、実際には対象を見なければ、*「見る」という固有相をいわば潜在的に保有している*ダルマのことであり、それ故に「見る」ダルマと同種、つまり同じ〈眼〉のカテゴリーに属する、というのである。有部はこのように、かれらの範疇論的存在論のもつ不備を補正した。

【三】さてこの彼同分は、最初期の有部論書『集異門足論』に、「眼とは、色を、すでに見た、今まさに見ている、*「やがて見るであろう」* 任意の眼、あるいは「それと同類のもの (彼同分)」である……色とは、眼によって「すでに見た、今まさに見ている」「*「やがて見るであろう」* ところの任意の色、あるいは「それと同類のもの」である」[T. 26 p. 429 a 6-12] というようにすでに説かれており、『法蘊足論』[T. 26 p. 429 b 23ff.] 『品類足論』[T. 26 p. 699 a 3ff.] あるいは『衆事分阿毘曇論』[T. 26 p. 634 b 12ff.] とごった一連の初期論書にもこれと同様の記述を見ることがができる。一方、後代の有部では、実際に対象を「見る」眼を「同分 (sabhaga) の眼」と呼んで彼同分に対置させ、諸ダルマを同分・彼同分に分類整理している [cf. 『俱舍論』Pradhan 1st. ed. p. 27, 16-p. 28, 22]。では、本来は補足概念に過ぎなかった彼同分有部の範疇論全体に適用されるに至った背景には、どのような契機が考えられるのだろうか。

【四】まず、同分・彼同分という対概念の成立を全体として見るならば、「法の枚挙」「根見識見論」という二つの動機を指摘できる。これについては、宮下晴輝 [1987]「同分彼同分について」(『印仏研』35-2) によって考察されているのでここでは触れない。そこでとくに彼同分だけに注意を払ってみると、素朴ななか

たちでは初期論書にも見られたこの概念を、より高度なものにした最大の要因が、不生法（非折滅無為）の導入にあることを指摘できる。

【五】無為とは任意のダルマが因果関係を越えたためにもはや生起しない、すなわち滅したことを意味し、これに折滅と非折滅とがある。聖者のこのころが、智慧の力（*pratisankhya* 折）によって煩惱のダルマとの関係をすでに断たれているとき、その聖者は折滅を得た、と言われる。このような「智慧の力による滅」以外の滅が非折滅である。たとえばある者が、なんらかの対象を熱心に見ているとき、それ以外の対象のいろ・かたちなどは、かれに認識されないまま生じ滅してゆく。そのため、それら別の対象を捉えて生起するはずだった別の視覚（眼識）などの認識機能のダルマは、もはやかれには永遠に生じない。つまりそれらは、生ずるための「契機を欠いてしまった」（*pratyakṣa-raikalya* 縁欠）のである [cf. 『俱舍論』 *Pradhāna* 1st. ed. p. 4, 10-15]。有部は）のような眼識などもまったくの無ではなく、未来にあつて生じない性質のもの（不生法）である、と考え、ダルマの範疇に入れる。これはいわばきわめて観念的に指定された存在であり、実際に認識のはたらきに関与することはもちろんない。しかしダルマである以上、このような不生の眼識も、その固有相によって（眼識）であることを保証されなければならない。そこで有部は、それは「見ない」眼根と同様、自らの固有相を潜在的に保持するダルマ、つまり彼同分である、と説明するのである。

【六】有部が非折滅無為を「縁の欠如による不生のダルマ」として考えるようになるのは、比較的後期、具体的には『婆沙論』の頃からと考えられる (cf. 宮下 [1989] 「非折滅無為」『仏教学七

ミナー」49)。したがって、彼同分の概念に不生法が取り入れられるようになったのもこの時期であろう。そしてここで注意しておきたいのは、この不生法の考え方を導入することで、はじめて彼同分が十八界全体に適用される概念になるという点である。有部は眼耳鼻舌身意の六感官（六根）とそれぞれに対応する色以下六つの認識対象（六境）、およびそれらと共同してはたらく六つの識知（六識）という十八の範疇をもって、わたしたちの認識を成立させている全存在領域を統括し、この範疇を十八界と呼んでいる。そして後代の論書は、この十八界を有見・無見、有対・無対、善・不善・無記といったさまざまな対概念を用いて分類的に考察するなかで、「どれだけの界が同分あり、どれだけ「の界」が彼同分であるのか」『俱舍論』 *Pradhāna* 1st. ed. p. 27, 16] と、同分・彼同分という視点からの考察を述べている。しかし『集異門足論』では、彼同分は根と境についてしか言及されていない。なぜなら六識（意界）は「生ずるならば必ず対象を把握する」『安慧』『俱舍論』 *Pratyakṣa* To 133a 6-7] のであつて、眼根や色と違って、現に生じながら認識のはたらきに関与しない眼識というものはありえないからである。したがって、彼同分の識は不生法の成立を待つてこそ可能となる。

【七】同分・彼同分という視点を十八界の分類に導入したことがきっかけで彼同分の概念がより考察され、不生法の概念が発展したのか、それとも逆に、非折滅無為をめぐる議論を適用した結果彼同分の意義が拡大し、十八界全体の分類概念として用いられることになったのか、どちらを先と見るかは不明だが、中期以降の有部において、これら両概念が互いに密接なかかわりをもって展開したことは確かである。 (Jan. 30/1993)